教育委員会定例会　社会教育課報告補足資料

ウィキペディアタウン in しまだ　実施報告

1、目　的　高校生の地域参画促進、情報リテラシー向上、図書館利用促進、島田市の情報発信

2．実施日　平成30年2月10日（土）9時30分～17時

3．場　所　しまだ楽習センター、博物館、川越遺跡、島田図書館

4．参加者　島田商業高等学校7名（生徒：女子4名・男子2名　教員：1名）
ウィキペディアン（編集者）4名・協力者4名
島田市4名（総務課情報政策1名、文化課1名、社会教育課2名）
計19名

5．協　力　文化課（博物館）、図書館課（島田図書館）、大井川輦台越し保存会

6．日　程　9:30～10:15　オリエンテーション、情報リテラシー研修
10:30～11:30　博物館取材・学芸員インタビュー
11:30～12:00　川越遺跡調査・保存会会員にインタビュー
12:15～12:45　御陣屋稲荷調査
13:30～16:00　島田図書館文献確認・執筆
16:10～17:00　各班活動発表、講評

7．活動状況

(1)オリエンテーション・情報リテラシー研修

ウィキペディアン編集者から、①ウィキペディアをはじめ、ネット上の情報は信用できない。②ウィキペディアは記事の信憑性を担保するため、文献からの引用という方法を取っている。ことを学ぶ。③今日は執筆しようとする案件について理解を深めるため現地調査や関係者への取材を行った上で、文献により裏付けを取り、それを適正に引用する方法で記事を書くという説明を受けた。

(2)博物館

川越遺跡、大祭について、展示見学、学芸員からの説明。

(3)川越遺跡

川越遺跡を調査。川会所で保存会会員から説明。遺跡の範囲など概要の把握に努めた。

(4)御陣屋稲荷

柳町御陣屋稲荷を現地調査。建屋の様子や高札書きなどを撮影した。

(5)島田図書館

島田図書館で関連文献を確認しながら、ウィキペディア編集員の指導の下、執筆し、①島田大井川川越遺跡　②島田大祭　③稲荷神社（島田市柳町）の3項目を新規に掲載した。

8．成果品

ウィキペディア掲載項目･･･別紙

9．効果

①ネット上の情報の真偽を見極める能力の向上　②地域に潜在する人や事物の魅力を発掘する能力とインセンティブの向上　③発掘した情報群を検証可能な形式に編集し信頼性を高めて発信する能力の修得　④文献引用の重要性と図書館の有用性の気づき　⑤一連の作業による自己有用感の高揚と社会貢献への持続的モチベーションの付与

座標: 北緯34度49分53.7秒 東経138度9分20.0秒

ウィキペディア

島田宿大井川川越遺跡

島田宿大井川川越遺跡（しまだしゅくおおいがわかわごしいせき）とは、静岡県島田市にある国指定の史跡である。

1966年（昭和41年）8月1日に国の史跡に指定された。川会所をはじめとする施設等20か所および施設のある街道が史跡に含まれる。

川越遺跡の番宿街。2018年2月10日撮影

目次

概要
沿革
　川越制度
　史跡指定と保護活動
施設
出典
参考文献
外部リンク

概要

島田宿大井川川越遺跡の「川越」とは、大井川の川越制度に由来しており、1966年（昭和41年）8月1日に文化財保護委員会告示第60号に指定された[1]。1970年（昭和45年）から1982年（昭和57年）にかけて、川会所の移築復元、札場、仲間の宿、二番宿などの復元が行われており、市による発掘調査が並行して実施されている[2]。また、文化財指定後の市による調査結果から、史跡の一部追加指定および指定誤りによる一部指定解除が2014年（平成26年）年3月18日に実施された[3]。

川越遺跡の川会所。2018年2月10日撮影

沿革

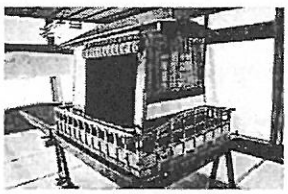
川越制度

徳川家康が征夷大将軍となった慶長八年以降に、諸街道は江戸防衛の要所として大井川の渡船、架橋を禁じられて「渡渉制度」が施されるようになった[4]。渡渉制度の当初は、一般の旅人と川越人足との話し合いで比較的自由に賃銭を決めていた。そのため、わざと深い所を通って高い賃銭を取る川越し無作法が横行していた。

寛文五年、川越賃銭の具体的取り決めを示す高札が出され、水の深さで問屋方で賃銭を定め、これより多く取ってはならないことや、川越しの者が渡す時は番人がつくことが定められた。翌年には川越し無作法を取り締まるための川目代が置かれ、その後も渡渉の統制化が強化されていった[5]。

元禄九年に川越業務が問屋場から独立し、川庄屋が任命される。この時に川会所も設立され、運営上必要な組織が次々と作られた。

明治三年、太政官布令により、河川の渡船や架橋が許されると同時に渡渉制度は廃止となった[6]。

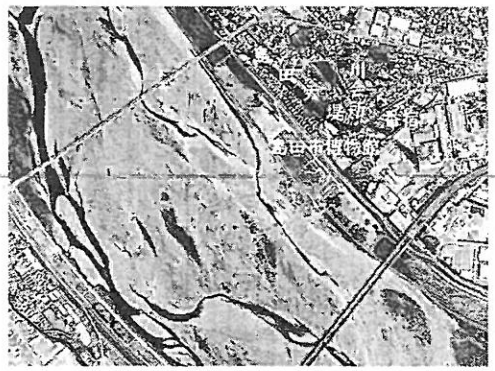

川越しに使用された大高欄連台。2018年2月10日撮影

史跡指定と保護活動

1966年（昭和41年）8月1日、川越制度に関する遺跡として島田宿大井川川越遺跡（しまだしゅくおおいがわかわごしいせき）の名称で国の史跡に指定された[7]。

2015年（平成27年）3月、島田市教育委員会により「島田宿大井川川越遺跡保存管理計画」が策定された。計画では、川越遺跡の価値を明確にし、現状と課題を整備するとしたうえで、適切な保存管理のための整備活用に関する方針が示されている[8]。

施設


2013年（平成25年）8月撮影の島田宿大井川川越遺跡周辺の空中写真。
国土交通省 国土画像情報（カラー空中写真）(http://w3land.mlit.go.jp/WebGIS/)を基に作成。（2013年8月10日撮影）

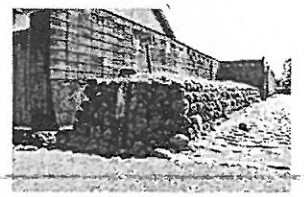
島田宿川越遺跡の施設は、主に川会所、札場、立合宿、番宿がある。

川会所 - 川越制度全体の取り仕切り、川越の料金設定、川札の販売を行う役所[9]。

札場 - 人足が川札を換金する場所[10]。

立合宿 - 立会人・陸取り・年寄・口取などと呼ばれる高齢になった川越人足が集う場所。立会人は島田宿に来た人の案内など、川越しにともなう陸上での様々な仕事を行った。立会宿のほか、仲間の宿、口取宿とも呼ばれる[11]。

番宿 - 一番から十番までの十組に分かれた人足の待機場所として使われていた。二番宿、三番宿、六番宿、十番宿は復元された[12]。


せき跡。増水時ここで水を食い止めた。2018年2月10日撮影

出典

1. ^ 島田市教育委員会（2016）、pp.14-15
2. ^ 島田市教育委員会（2016）、p.17
3. ^ 島田市教育委員会（2016）、pp.17-18

番宿。2018年2月10日撮影

4. ^ 遠州路の史蹟探訪　第四巻　東海道とその周辺(1)p.56
5. ^ 河原町史話pp.26~29
6. ^ 遠州路の史蹟探訪　第四巻　東海道とその周辺(1)p.63
7. ^ 島田市教育委員会（2015）pp.14-15
8. ^ 島田市教育委員会（2015）p.1
9. ^ 島田市の文化財(1978)p.6
10. ^ 島田の文化財ガイド(1998)p.4
11. ^ 島田の文化財ガイド(1998)p.4
12. ^ 島田の文化財(1984)p.18

参考文献

- 『国指定史跡 島田宿大井川川越遺跡保存管理計画』 島田市教育委員会、2015年3月24日。
- 『島田の文化財』 島田市教育委員会、田中印刷、1984年3月31日。
- 『河原町史話』 河原町々史編纂委員会、2010年1月20日。
- 『遠州路の史蹟探訪 第四巻 東海道とその周辺(1)』 本田猪三郎、有限会社 谷島屋、1992年4月18日。

外部リンク

- 島田市博物館 (http://shimahaku.jp/)
- 大井川川越遺跡-島田市観光協会 (http://shimada-ta.jp/tourist/tourist_detail.php?id=11)

「https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=島田宿大井川川越遺跡&oldid=67381296」から取得

最終更新 2018年2月14日 (水) 11:17 （日時は個人設定で未設定ならばUTC）。

テキストはクリエイティブ・コモンズ 表示-継承ライセンスの下で利用可能です。追加の条件が適用される場合があります。詳細は利用規約を参照してください。

ウィキペディア

島田大祭

島田大祭（しまだたいさい）は、静岡県島田市の大井神社の祭りである。一般には帯まつり（おびまつり）の名で知られる[1]。3年に1度、寅・巳・申・亥の年の10月中旬に開催される[1][2]。日本三奇祭[3][†1]、天下の三大奇祭[2]、東海の三奇祭[5]とよばれることもある。

島田大祭	
イベントの種類	祭り
通称・略称	帯まつり
開催時期	10月中旬[1]
初回開催	元禄8年（1695年）[1]
会場	静岡県島田市本通およびその周辺[1]
来場者数	約80万人（2001年）

神輿渡御に従って続く大名行列、鹿島踊り、屋台が全体として一つの祭事であるが、大名行列の際に大奴が左右に差した日本の太刀に帯を吊るしているさまが特徴的であることから、かつては「帯まつり」という呼称が祭事の総称として使われていた[2]。「島田帯祭の大名行列」は静岡県指定無形民俗文化財に指定されている[6]。2001年（平成13年）の第103回島田大祭の期間中には約80万人が訪れた[7]。高円宮憲仁親王・憲仁親王妃久子夫妻は第103回島田大祭を視察した[8]。

目次

伝承と変遷

神事

文化財

静岡県無形民俗文化財

脚注

注釈

出典

参考文献

外部リンク

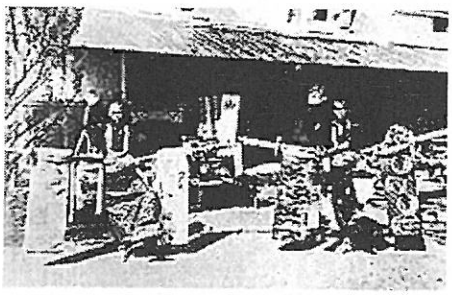
伝承と変遷

島田大祭は、1695年（元禄8年）陰暦9月に始まったとされ[5][9]、1992年（平成4年）に第100回の大祭が行われた[10][11]。祭りの詳細は『志太郡誌』に記述があるものの、時代により変化してきており、原型は明らかになっていない[4]。帯が祭りで奉納されている由来は、他の土地から嫁いできた花嫁が晴れ着姿で大井神社を詣で、その後で町内をめぐるという島田の習慣が、宿の発展にともない多くの戸数をまわるのが困難になり、身代わりとして帯を神社に奉納し、後日町内にその帯を披露する形式に変化したためとされている[2][12]。

大祭が始まった当初は、山伏姿に仮装した川越人足に先導されて神輿が渡り、その後ろに鹿島踊りが行列になって進んでいたが、その後、寛政年間（1789年〜1800年）から殿様行列が加わるようになったといわれている。その後、山伏姿が「奴」に変化して大奴と呼ばれるようになり、殿様行列に組み込まれるようになった[13]。かつては人々が見栄から競って華美な帯を用意していたため「島田に嫁にやると家が傾く」と言われた[2]。現在は、安産祈願を目的として貸衣装店で借りることが一般的となっている[14]。大祭最終日に行われる「神輿渡御行列」で猿田彦命の後ろを進む大鉾には、大祭のはじまりを示すとされる「元禄八乙亥歳九月吉祥日」と染められた旗が掲げられている[15]。

神事

- **大名行列**


大奴（1929年）

第七街の担当で編成される。島田宿の代官が大名役を務めていたが[16]、1794年（寛政6年）、代官所が駿府紺屋町に移され島田陣屋となって以降、宿場内の名家・名門の子どもが大名役に据えられたという[16]。お先触を先頭に、大長柄、具足、持筒、御先騎、槍持・片箱、赤・黒鉄砲、お弓、具足、持筒、御先騎、槍持・片箱、大奴と並び、行列の花形は総勢25名の大奴である[17]。

- **神輿渡御**（みこしとぎょ）

大名行列の後に、神輿渡御行列が続く。1893年（明治26年）に奉納された神輿は400kgの重さがあり、新田町の氏子により担がれる[18][19]。

- **島田鹿島踊り**

第六街が担当している。白丁、三番叟、お鏡、鼓、ささらの総計40人ほどになる[19]。

文化財

静岡県無形民俗文化財

- 島田鹿島踊 1957年5月13日指定[20][21]
- 島田帯祭の大名行列 1996年12月12日指定[20][21]

脚注

注釈

1. ^ 『年中行事辞典』は山梨県富士吉田市の吉田の火祭、島田大祭、愛知県稲沢市の国府宮はだか祭りを「日本三奇祭」としている[4]。

出典

1. ^ a b c d e 島田大祭 (https://www.city.shimada.shizuoka.jp/kank 島田市
2. ^ a b c d e 祭礼行事 1992, p. 88.
3. ^ 小和田哲男／編 2000, p. 53.
4. ^ a b 島田市博物館 1992, p. 6.
5. ^ a b 島田市史編纂委員会 1978, p. 776.
6. ^ 『第107回島田大祭 島田帯祭』本通り7丁目商店会、2013年
7. ^ 「島田大祭に"全国"大賞 抜群の観光貢献度」『静岡新聞』2002年7月5日、23面
8. ^ 「島田帯祭り大旅籠柏屋 高円宮ご夫妻が視察」『静岡新聞』2001年10月14日、23面
9. ^ 島田市博物館 2007, p. 12.
10. ^ 東海道と祭り 1996, p. 112.
11. ^ 文化事典 2006, p. 439.
12. ^ 小和田哲男／編 2000, p. 54.
13. ^ 『大井さんと大まつり』島田宿・金谷宿史跡保存会、2013年、p32
14. ^ 祭礼行事 1992, p. 89.
15. ^ 島田市博物館 1992, p. 7.
16. ^ a b 島田市博物館 2007, p. 22.
17. ^ 『東海道島田大祭記念誌』
18. ^ 島田市博物館 2007, p. 29.
19. ^ a b 『第一〇七回島田大祭島田帯祭』
20. ^ a b 『日本の祭り文化事典』東京書籍、2006年、p.439
21. ^ a b 『日本の祭り　知れば知るほど』菅田正昭、2007年、p.197

参考文献

- 『島田市史 中巻』 島田市史編纂委員会、島田市役所、1978年。
- 『静岡県の祭ごよみ』 静岡県民俗学会、静香新聞社、1990年。
- 『第二回企画展 島田大祭展』 島田市博物館、島田市博物館、1992年。
- 『祭礼行事・静岡県』 桜楓社、1992年。
- 吉川祐子、中村羊一郎 『東海道と祭り』7、静岡新聞社〈東海道双書〉、1996年。

- 小和田哲男／編 『静岡県の不思議事典』 新人物往来社、2000年。
- 『島田宿と大井川』 島田市史編纂委員会、島田市教育委員会、2002年。
- 星野紘・芳賀日出男／監修 『日本の祭り文化事典』 東京書籍、2006年。
- 『第四十三回企画展「島田大祭展」』 島田市博物館、島田市博物館、2007年。

外部リンク

- 島田大祭 (https://www.city.shimada.shizuoka.jp/kankou/shimadataisai_105.html) 島田市

「https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=島田大祭&oldid=67395720」から取得

最終更新 2018年2月15日 (木) 15:36 （日時は個人設定で未設定ならばUTC）。

テキストはクリエイティブ・コモンズ 表示-継承ライセンスの下で利用可能です。追加の条件が適用される場合があります。詳細は利用規約を参照してください。

座標: 北緯34度50分4.2秒 東経138度10分37.2秒

ウィキペディア

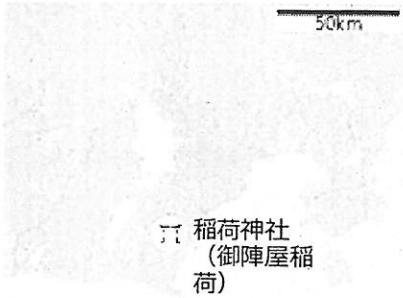
稲荷神社 (島田市柳町)

稲荷神社（いなりじんじゃ）は静岡県島田市柳町にある神社[2]。御陣屋稲荷神社とも呼ばれており[3]、悪口稲荷という名で知られている[4]。大井神社の飛地境内社となっている[5]。

稲荷神社 （御陣屋稲荷）

静岡県島田市にある稲荷神社（御陣屋稲荷）の本殿

所在地	静岡県島田市柳町
位置	北緯34度50分4.2秒 東経138度10分37.2秒
主祭神	倉稲魂命、保食神[1]
神体	稲荷社
別名	悪口稲荷
例祭	2月初め午の日
地図	



目次

祭神
歴史
悪口稲荷の由来
年中行事
御陣屋稲荷の絵馬
出典

祭神

- 島田市野田のご神体を一緒に移転させた際に、屋敷神として祀られた。

歴史

- 1616年（元和2年）に島田代官所が宿内柳町へ設けられた[6]。
- 島田代官所は1794年（寛政6年）に駿府代官所に統合されて、のちにこの稲荷祠は御陣屋稲荷と言われるようになった[6]。
- 陣屋の校内は一般の人たちの立ち入ることは許されてはいなかったが、稲荷祭の日である旧暦正月（新暦二月）初午の日だけは、構内を開放して一般人に自由に参拝を許していた[7]。

島田代官であった長谷川藤兵衛長盛

悪口稲荷の由来

御陣屋稲荷では、新春の初午祭事に町民たちの参詣がゆるされた。その際、役人の評判を把握するため、代官が町民から役人についての噂を集めた。町民は噂を直接申し立てるのをはばかり、役人の評判を人形に託すことにした。これが風刺人形のはじまりである。のちに、町民同士の噂まで人形に託されるようになったことから、御陣屋稲荷に悪口稲荷の通り名がついた[8][9][10]。

年中行事

毎年2月初めの牛の日に例祭が行われる。島田宿内の噂されている不正などの風刺が立札や軒灯に描かれ、風刺人形が展示された[11]。

平成16年度より、第三セクターである「まちづくり島田」の主催で、毎年1回「愛するあなたへの悪口コンテスト」が開催されている。村松友視が審査委員長を務めている[12]。

御陣屋稲荷の絵馬

御陣屋稲荷の絵馬には以下のようなものがある[13]。

- 平忠盛が祇園社で献燈の僧を捕える図
  - 金谷の画家で、崋山門十哲の1人でもある永村茜山が描いた。
- 日の出に鶴の図
  - 夫婦和合や子孫繁栄を祈ったもの。
  - 崋山門の画家である福田半香が描いた。
- 松に鶴の図（桑原桂叢）
  - 崋山門の福田半香や平井顕斎らと親交のあった、桑原桂叢が描いた。
- 馬の図
  - 「島田駅志」などを著した置塩綯斎が描いた。
- 太郎冠者の図
  - 桑原桂叢が描いた。
  - 太郎冠者の図は現存していない。

出典

1. ^ "飛地境内社 (http://www.ooijinjya.org/precinct/precinct01)". 大井神社. 2018年2月10日閲覧。
2. ^ 『静岡県の歴史散歩』 山川出版社、1978年7月20日、169頁。
3. ^ 森数男 『郷土探索「島田宿の文人たち」』 孔芸印刷、1993年11月3日、82頁。
4. ^ 大塚淑夫 『東海道島田宿の歴史』 島田宿・金谷宿史跡保存会、2016年4月21日、110頁。
5. ^ "飛地境内社 (http://www.ooijinjya.org/precinct/precinct01)". 大井神社. 2018年2月10日閲覧。
6. ^ a b 『島田市史 上巻』 島田市役所、1978年3月30日、609頁。
7. ^ 『島田市史 上巻』 島田市役所、1978年3月30日、610頁。

8. ^ 村松友視, 「愛するあなたへの悪口コンテスト」実行委員会 『愛するあなたへの悪口』 毎日新聞社、2008年、6-7頁。ISBN 9784620318714。
9. ^ 島田市史資料編等編さん委員会 『島田宿と大井川』 島田市教育委員会、1992年、132-133頁。
10. ^ 大塚淑夫 『東海道　島田宿の歴史』 島田宿・金谷宿史跡保存会、2016年4月21日、110頁。
11. ^ 大塚淑夫 『東海道　島田宿の歴史』 島田宿・金谷宿史跡保存会、2016年4月21日、110頁。
12. ^ "第１4回「愛するあなたへの悪口コンテスト」作品募集 (http://machi-shima.com/aiwaru.html)". まちづくり島田. 2018年2月10日閲覧。
13. ^ 森数男 『郷土探索「島田宿の文人たち」』 孔芸印刷、1993年11月3日、82-86頁。

「https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=稲荷神社_(島田市柳町)&oldid=67404378」から取得

最終更新 2018年2月16日 (金) 12:51 （日時は個人設定で未設定ならばUTC）。

テキストはクリエイティブ・コモンズ 表示-継承ライセンスの下で利用可能です。追加の条件が適用される場合があります。詳細は利用規約を参照してください。